

## ◆第5話◆ 書体のはなし

今回は、ややマニアックさが表面に出てしまいそうなテーマである。

「活字」は、明治2（1869）年に本木昌三が設立した「長崎活版伝習所」に端を発するとされる。歴史をたどれば、本木の後継・平野富二が東京築地で「築地明朝体」という新聞活字を製造販売し、これが浸透することで津田三省堂の「正楷書体」や神崎正誼「弘道軒清朝体」など多くの書体が製造販売されるに至った。こういう歴史があって、現代活字の世界では、最も著名なものが大日本印刷の「秀英体」であろう。



活字の秀英体書体見本（本図は、縮小しているのもので実物サイズではない。）

一般的には、活字鋳造販売を行っていたイワタやモトヤといったところが大手の活字製造販売業者とされる。また、活字には、個性があり、各印刷会社独自の「パターン」を有していた。精興社は、漢字に比べて平仮名のサイズが見た目で一回り小さいという特色特長で、一時代を築いた。製品を見ると、各印刷会社の特徴がよくわかる。電算写植（電子組版）化が進むと、各印刷会社は、それまでの文字パターンを維持しようとするところと全く別の文字に置き換えようとする動きが起こる。確かに自社文字パターンを残すとなると、活字パターンの移植ということになり、所有する漢字5万字余りの文字パターン移植作業には、数千万円から億を超える（2000年ごろ）経費を覚悟せねばならなかった。

の意であるが、この両者を同じ意味に使うこともある。

### 活字の大きさ

活字の大きさは、もちろん種々さまざまである。書物に最も多く使われる活字の大きさは――

12 point, formerly called PICA (12ポイント、ピカと誤音する)

11 point, formerly called Small Pica (11ポイント、以前にスモールピカといわれたもの)

10 point, formerly called Long Primer (10ポイント、以前にロングプライマーといわれたもの)

9 point, formerly called Bounteous (9ポイント、以前にブントウと誤音する)

8 point, formerly called Brewer (8ポイント、以前にブレイカーといわれたもの)

④ わが国の活字の大きさは、点数にともなものとポイント数によるものがあり、これが今もって通用されている。書物に最も多く使われる活字としては、八ポイント、九ポイント、十ポイント、十二ポイント、十四ポイントおよび八ポイントとほぼ同大の六号、十ポイントとほぼ同大の五号、十四ポイントとほぼ同大の四号などが使用されているが、十ポイント以上の大きになると、主として見出しに使われる。

### 版面

ページの版面(活字面積)は、多くの場合、美的な考慮と同時に経済的な考慮に支配される。われわれの多くは、余白を広くとり、行間をたっぷりあけるのが好きであるが、書物におけるすぐれた価値が、最低の値段で、最大の内容を与える点にあるとするならば、余白を広くし、行間をたっぷりあけることは、そのようなすぐれた価値とは両立しないことになる。それにもかかわらず、版面をきめる場合に、適当な余白をとり、行間を十分にあげ、語間を平均にあけることに十分に考慮を払うことは、非常に大切である。このようなわけで、印刷所の出してくる組見本を、予定の判型の紙にあててみる

『最新版出版概論(原書第8版)』スタンリー・アンウィン著、日本エディタースクール出版部発行から抜粋

書体といえば、書籍に使用されるポピュラーな明朝体やゴシック体が代表的なものである。これに楷書体、教科書体などが加わり、和数字の平型(4文字で正体3文字分)があり、形の違いが枚挙に暇がないといえるボリュームになる。加えて、文字パターンのメーカーによって文字の様相が異なるということも併せ考えれば、いよいよその中を知りたくなるというものだ<sup>3</sup>。

以上のように活字(金属製品)でも数多くのバリエーションが整備されていたわけであるが、それにとってかわった写真植字になると、もっとバリエーションが増えることになる。何故か、といえば、もともと活字では賄いきれない分野を担当してきた技術であるということなのだ。図形や細かな表組みは、写植に頼る方が手っ取り早い。烏口で線を引き、文字を貼り込むという作業は、柔軟性に富むといえる。加えて、ある意味融通性に欠けることとして、文字を構成する線の太さが、文字の大小で変化しないということである。ここが活字と写植文字の一番の相違点である。活字は、そのサイズによって微妙に線の太さが調節されていて、太い細いを指定する必要がなかった。(株)写研の書体名

<sup>3</sup> 写植書体の参考例：『百の年輪(日本学園百年史)』『西高の五十年(東京都立西高等学校)』ほか

でいえば、ナールやゴナといった新書体が重宝された時代である。見出し用の書体、例えば、中明朝では活字と比較して弱弱しく感じるので、太明朝体にするなどの工夫が必要とされた。これは、電算写植でも同様である。だから、写真植字では、ヴィジュアルに重点を置いた紙面づくりが志向されるようになった。読み物としての「書籍」に多種類の書体が混在するのは、視覚的に製作者の自己満足は充たせても、読む側にとっては気忙しく落ち着いた読書にはそぐわないものと言えるだろう。電算化、電子化による紙面づくりは、活版の時代や活版イメージを生かした紙面づくりへと制作者の目を向けさせていると考えられないだろうか。